



中村俊定文庫
文庫 18
458

一冊
一冊
集





叙

名卷大電書坊著

土龍庵白明主人町立洋に師の寓此
池を履て分守一歩々年々く編
まら集と以ふを輯る余浴子行子
たよりて洋に遊ふ時に嘗て可
何し遊破れ士常に心く工ある
私を入るを造化を眼中ありてむふ

年の餅 樺子生る

きりぎりす

白明

明和六年己丑十二月三十日

首春

あけはれは初陽と迎ふ時子代りて元旦
春に作てゆくは春の 句位堂に松竹首全雅を
請ひてをしけを新く言を採る

大崎を又 徳みし 吹の巻

白明

我師海表にありてきこふ中一もも春歌を志し
うきうき 我れもゆくは春の 句位堂に松竹首全雅を
目とまじりてゆくは春の 句位堂に松竹首全雅を

あきわきの柳子撫る

人かお

春望 埴石堀子おろし
垣無とて傲眼

山子帆子釣み 潮水あやの春

庚寅良節

式

年一法邦北の友心を多しうて手向の白くを
らつぬと集と号を望外くと精神を感る
との多し梅の花を中事と為るをよめて花の香を
園位上人の持を背後の嶮岨にけり梅の
言にたりて夜に多しうて梅に士に執るに梅
大出の波をよめり梅の花の白に中事法を白く
とよめたりて多しうて梅の法に供する其
白く此の多しうて梅の法に供する其
前後の法を多しうて梅の法に供する其

=

湘中大磯

きみよん人少うして神さるる性
大崎と瓜をうけて本とをよめ
神さるる梅の花あり梅の香
よめり梅の花をよめり梅の花
一花に梅をよめり梅の香
中途うら皇へもよめてよめの香
梅の香や答に梅の香をよめり
梅の香の白く梅の香をよめり
よめり梅の香をよめり梅の香

梅

丹人

朱帘

人連て又りたりと里物四々

淇水

あゝとてとてとてとてとてとてとて

柳とてとてとてとてとてとてとて

凡明

此の法とて所法や本とてとて

影と葉に押あてりとのと

梅仙

とてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとて

白桂

四

梅とや美しとてとてとてとて

飛生に行あひの事や時々

増ややめく人年とてとてとて

吟所

歌入とて勤うぬあや山出々

水香とて神に沈てうむこも

山所

とてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとて

法中用田穂と楼

足跡を逢う証のきと山出々

多所

あつたにえにちくまは村を
たははらけ界隈をりさの
跡にあらももあや—花はり
行ふそまとなり—とくは
積まや奇藤子ゆき此録
影入てあ澄—り—谷あり
川畔や枝をえ様を松の
名をと集ふも種をすや
口ゆてん—り—人か花はり
あつた子木くと清—り—

去

信

梅

五

きき葉に封—り—り
りも月—り—り
抄をを仮此葉—り—り
き子見ぬゆも浮や—り—り
此細の外に—り—り
—り—り—り—り
空りて葉に—り—り
—り—り—り—り
—り—り—り—り
—り—り—り—り

戸

鳥

中
拍

あつたにえにちくまは村を

下地

鶴を舟を啄む魚やむせの巻

丹波

舟に乗りて舟をりて去るなり

松崎や舟をりてめくさの巻

比木く人舟をりて舟をりて

鳥羽

舟に乗りて舟をりて中七巻の巻

積舟や榎橋に舟の巻

舟に乗りて舟をりて舟をりて

江戸
江左

舟をりて舟をりて舟をりて

舟をりて舟をりて舟をりて

上州沼田

舟に根を擡し舟をりて舟をりて

去海

舟に根を擡し舟をりて舟をりて

舟に根を擡し舟をりて舟をりて

舟に根を擡し舟をりて舟をりて

来菲

舟に根を擡し舟をりて舟をりて

舟に根を擡し舟をりて舟をりて

舟に根を擡し舟をりて舟をりて

夷川

舟に根を擡し舟をりて舟をりて

舟に根を擡し舟をりて舟をりて

風下吹中現るるに谷の如く
如布

飛舟の如く此種ふや本と云ふ
長泉

切流に舟を吹送や其の如く
鳥存

舟より汚きるるや谷の如く
鳥存

舟の如く此種ふや本と云ふ
鳥存

谷の如く此種ふや本と云ふ
鳥存

上野東金

舟の如く此種ふや本と云ふ
鳥存

舟の如く此種ふや本と云ふ
鳥存

舟の如く此種ふや本と云ふ
鳥存

巨梅

うききりや家敷の追ふてきりて
大崎や後には舟のまの船

少色杉坂

吳扇

何人の楊枝て書り花山り
閑古き斧のきり杉にけり
奄のま行東出まの系北畑
注連縄の池とまきこり藤花と
木陰とそりなき花わひ子
魚の舟何人そ舟のま
おの白をゆりておれと

五蓮

繪波

此のおとあそびもあそびうも
青花なきおのま陰や梅北と
結ひ目ハ柄にらまそ藤のま
時き花ハ咲くまこ北阿一
世の臺を海へ海へまのま
おと舟中にあそびのあそ
時きおのまかお木末とま
るくそなまそとまらまら北と

蛙扇

魚洲

上陸東金

峰に涌くまじらやう月梅

文机

川柳やあぢく人を待たるる
文の拾ふも寝るおろし此を

上野川横川

く見えてこゝに春川一橋を

山

川柳やあぢくを川に飛たうり

春川の輝と花柳の好まの事

争ふことと中うきあううき

山

川柳やあぢくを川に飛たうり

操子の綱子一に柳うき

柳枝子流るるおろし山出る

急園

ト三又

日北の木乃るは油やうき

積りやととり持しは流佛

さるる日北の枝やわらわ

鎌田 秋江

さるる日北の枝やわらわ

さるる日北の枝やわらわ

山もつれぬるさるる

御中万田 信長

傘持ておきてりやわらわ

柳枝子流るるおろし山出る

下野川我野

尼方に干物と一桃の七

急石

お登のわらぬめゆわらぬこ
しらけ家波又ゆ——まじ裾
少きにちんまのきやわ茶出
比山せぢる日ふつそ閑古き
おききりて葉に清子おれを
麻安や水の葉氷にありくと
ふたきり飛てもりまられ中
積まや炭竈中てきのぬら

眉尺

徐丹

海中赤羽

ふ山のきく遠くせきり 柳梅

公羊

十

穴庭へ相もほまをきり
る川きやまきりるぬれり
寸金ゆきとなりるまじり
既に柳る空に生じておれを
反橋此へ程晴——りあま
平山にりるこりまてゆら
幾多にねとゆきり——り
め鳥渡りそるやわおれを
谷を晴まハ日りて梅うら
水汲の徳に表てあるぬれり

二面

巴橋

高足

心も一室に切り北窓のまはるかに
眺みし世や〜とまゝのまゝに
死るるなり〜杉に降りておぼろ
枯の木もまじりぬに〜りりり
乞はるる日に乾くぬや利お花
さちさちと木魚をたたくる
おきや夕ぬる田舎〜是の旅

俳中一困田

雲々〜生きたる〜
流臺子〜く〜研や〜

田村

書

再巻

洞糸

士

神もや筆の波も〜
〜の化粧ひ〜
川柳や〜
〜も〜
春もや人子餅の〜
片隅子〜

東武

心〜て〜
〜人の〜

几檜

林舎

銀形

御書に依りて抄く文を

武中八王子春曉庵

書橋

舞臺に浮て山城をゆく
花をよめ笑ひ佛や閑子
神をや及檜やうり
まのふりて目一筋に梅北
義をよめハあそりこ
大崎や不二にの勝も
半皇に富士ハ溜りて花
賑る美をよめ

志光

百斗

十四

積をわきハ下り世の
みり一葉をよめ花とな
花をよめハあそりこ
沈むと筏何あそりこ
ちとよめやの海
夷度も見何の皇
行善の人とあそりこ
海を北日一
作向の目も
咲也一人をよめ

字曉

弄石

印紅女

出き女

崇棟改
棟

分入を又わき入七出らうる
一花を刑策うして本を
神もわが松系うへく物なり
梅もわが尖き枝子出らうる
竹も好間ハ枝のみわきうる
柳「と携るるわが」の物
椴わきと乃さく波も花なり
まが柳「のまが」此玉印「の時
鉢植ハ玉うり生してりまの
不のく「と一花のま」神梅

長相改
千二

産石

花平

三三

十五

比叡を越き、此力や本
の東和陸の澤より輝ひ
楚まに木ハ積り「も出り
伏見「とて、水ハ「うま本
積もわが形と宜し、家強造の
益下ま「枝を養ふわが
見跡「と養朽「を本
冬「統る、あ「わ「木
忽「日「馬「兒「わ「あ「さ「ら
皇「ま「峰「を「遊「ぬ「ま「わ「時「

多梢

竹
竹
竹

一路

抱こ子に〜して見せむ所せむ
縁日ハ神さ〜そのむ二を
家僧子喜ゆせりお七也

泉之

上総お之内

有隣

開うぬを花のしりぬ前橋
川柳や子も遠く枝の上
陸もそ〜ゆりぬり婦也
ふ〜を并らば〜してゆり
似〜を拂ふ〜て花の風
送帆子〜と送るを〜行〜子

家友

弘帆

十九

世を背戸へ送る〜や桃のむ
川柳や真に傳時翁てり
神も〜解の不二に〜て見ゆ
上を〜る〜ハゆり花を
探り〜先〜ゆり〜子
道場と〜へ〜川〜
み〜聖北去ハ言は〜
や〜吹や〜の黒子〜
〜ハ〜戸の〜の〜
梅受や言不〜を〜の思

通坪 浦川

松口 繪枝

未名 春江

江戸 孤月
八王子 其笛
吾先

さしきりや花ははらへる様印さ
能く人の子をある桂のり
花ハ花谷子受てもやぶ出ら
つらんまにおの神言や時
交方
未是
江戸
八王子
正角

下総演習

花さりりつるも唯居と熊歌
柴花

時きりつる屋上の松の風
涼吹

松陰をまのむ人なり花をり
右板

花を本にもまらして花さり
右板

玉粒在中

干

つる月の木はるも時
木安
大至

松花大電中

花さりり走らぬ麻の柱ふし
草月

気さしゆをさして通る花時
鳥志

花さりり花さる人花さ
鳥志

花さりり花さる人花さ
鳥志

花さりり花さる人花さ
昨日

花さりり花さる人花さ

花さりり花さる人花さ

世にわたり世にわたりとて人の世に
飾なき皇となりて皇本とて
積もる世にわたりとて人の世に
学の子にわたりて世にわたり
勢隆き世にわたりて人の世に
伊何の世にわたりて人の世に
神操の世にわたりて人の世に
時をわたりて皇となりて皇
何時とて皇となりて皇

鳥明

字石

紫居

主

二にもに聖ハならそ神出
伊東の世にわたりて人の世に
八百里不二又新の世に

白明

法中少田系

在道ハ接して何なるに
皇にわたりて皇にわたり
川原ハ只一舟にわたり上
帆柱に皇末宮ありて皇

素白

松波

伊勢之見聞

伊勢の世にわたりて皇にわたり

伊勢

余煙子換り一歩如の流と平心と
澄一澄海子漕り一永をみる 鳴呼
をを見一む一の心ありて巻にき紀
一きを初めゆりて精神一永くし
まゝくまゝの心ありて

憐鳥

飽きて奴食一旅日心を角るまをまを
難るゆ先出、其初にまむ一き
病床子卧たううまの背後の嶮
れき一ゆ一と興一まひ一や家子、替む
へ一餘力の念家、其まいたもまを
神鶴に目とめてるまを嘗にまいた志を

發し書をいふ友を未だし一はあまの子は
もて茶室に臨傲するは四齋くく平
心なる所初友誼人羣はし一嗚呼和して
流るるや練筆し一此書と書るは先陰の
流行卷に書し一そに書くは一お立て
見せしと一任し月夜を定むるは一
心し書し一お心や暗にそひさく
其夜もまゆもあまも一はし

女と花を己控しりるも又みはれも何らに
噫せし一は武節にまふる古なるに一略を
情むれと一は田舎を春と書し一
あまのこころ短き日記と一しあまの
然し一はまのこころあまの日記と
ふに書しあまの日記と一はあまの日記と
頃も今も一は賤女と一はあまの日記と
し一はあまの日記と一はあまの日記と

物も毎の情即て遊も川柳の癖も
その観もも只十七言をりて足る如くに
あそびを成地は羊木を獣の念を録るの
一物師恩の所は仰る仰るしや心を
用ひあそびや五月晦夜師の位下に
あそびありて成事師出るとも能者首首
早言と観を實一と成

玩世辭

明之海に世に三夕也をりて情に世閑とあ
地なりとる少く此をり一白明更のそを
訪て訪ふを情一と成りりりりりりりり
習習塵を遊る所は白に戸少とるあそび
世に情集とるく情一と成りりりりりりり
日飲とるく口おと物を生るともあそび
まじりた紫糸を結より称歎一と成りり
終日急とるく中をり余ハ就世を其い

者核と口よりとせぬと見ゆと輕法と削る
玉屑茶葉海子筋の山より一峰なる
皓鶴に素心なく松に素心なく旅人の心は
稱して進むる不舎の八雲の雲は家お
ろくゆる日しり於平夕暮れをひ又家へくは
降し沈時を花子破りわと家より得に花好
一老をりしを同りして入る也英木とた
を此花ぬめてみり一室とすむおかし
おん吹かす吹の面を顔と名にんる御家七
おもろくわたりともひのうらに在りく

後ハ子引の玉となりて手にたて持てるを
きと遊に臨む大ゆわ波にまをたむの
多た士の遊作もゆくに地もわう鼻息
何し床と寝るもあふ流汗祖寐は若
此改帳子外もも一叫異人を哉其白
事海肆に入るもあちを鳴呼わや
傍のあつちをまをるも一交はる余
あつちをまをるも一起川斯と告る
三伏のあつちをまをるも一交はる
あつちをまをるも一交はる

春ハおりし物に種とて俗を避き
心積まざるの酒なりとて神堂の御子
押もささく時く山くの名妙のき
義ハ衆をとも欺くなく無と博く
さるる所ハ心正に身正をさるるにこそ
なりしにこそ

己丑初を時より奄朱迄の間に
之を採て一路ほりしにこそなり

跋

古聖象を取らざるは地の自然なり
甲乙此象をとりては言に形を討ハ
人達を導きし和平也此は和を
貴む詩歌の爲なりしも此を我
能く佐成し中品以下の和平
たしむるをそとく覽し易しと併

今事寧して温奥の山を越ゆる
難し信友書檜子う園位事いと美
活此言継子私なきの評論なるへ
多岐み士云譬言喻ハ所をハ下り
苗芽出ると有りてある強て風を
雑る趣阿るを宋古多に淋しきと
形容志しめハハ無きを花為此
穂先出るとハいと濃とらハハと云く

跋

たふとささるも志して昔うひも白も
色はよく積とささるともあくとささるわ
雪の枯尾花とハハハ分際中一き
人此誰う泣さる人ハハある多き此き
麻も雖も夫婦て阿く枯れを渠の
本舞の志をりきと先那子兼
老をささるハハハハハハハハハハ
之需とささるハハハハハハハハハハ

家をへ一筆目をあつて集を完備して
 手向きのとなをを詞友と俱子志
 筆法たむむを祈るのに於平私を
 納さるるを確日中一に抑何と志ても
 明治三十八年五月十日金
 明時七就次庚寅五月日勝引合百斗誌ありた
 手向取致しす
 ち吉
 二三日前より、他身まら女の子供但漢た
 此と別きてボもりしすら
 跋二
 中詞

安人の江二平一
 復

三平



